

明治五年九月十二日（旧暦）新橋・横浜間の鉄道が開業した。文明開化を標榜する明治新政府にとって、鉄道の敷設は、新生日本のイメージを内外に印象づけるためにも是非ともやり遂げるべき大事業であった。実際、新しい時代のシンボルとして、陸蒸気ほど人々に鮮烈な印象を与えたものは無かったのではないか。その起点である新橋ステーションは、まさに近代日本の始発駅となったのである。

新橋ステーションの復元

東京汐留
鐵道館
蒸気車
往返之圖

東京横濱
年引出車
八月九日十時十五分
年引出車
八月二十四日十時十五分
横濱迄往來在連
上等 全一兩二米
中等 全一兩二米
下等 全一兩二米
小兒半價
事便全一兩

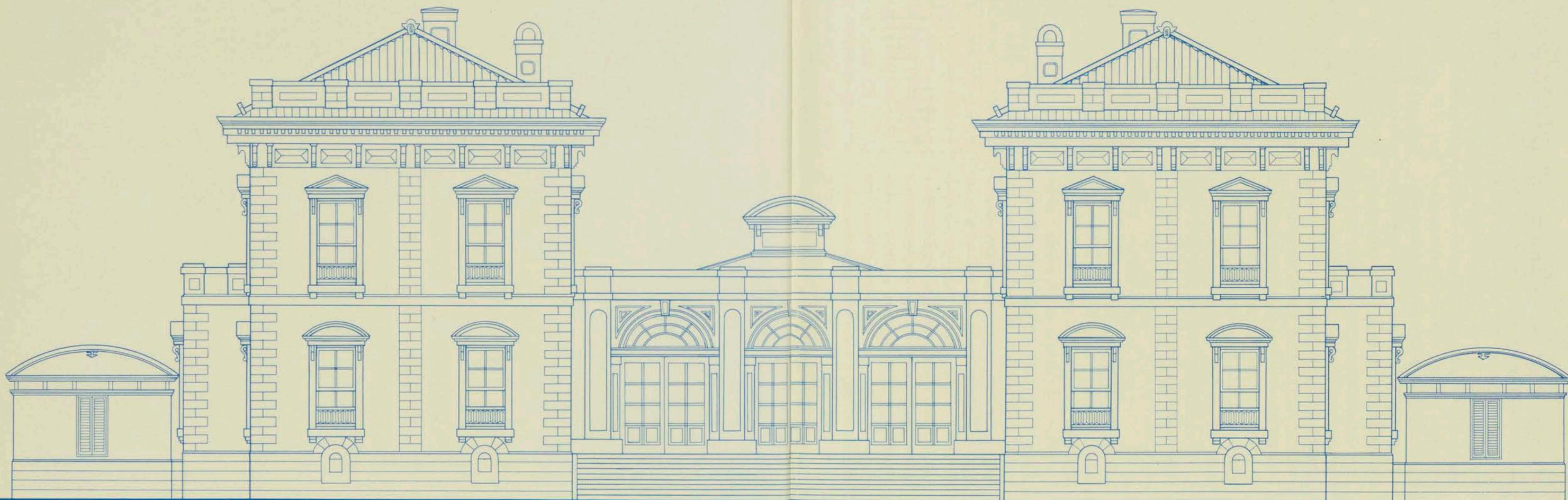


広重：東京汐留鐵道館蒸気車往返之圖 交通博物館蔵

菊池重郎・協力：大林組プロジェクトチーム

SHIMBASHI STATION

新橋ステーション復元図

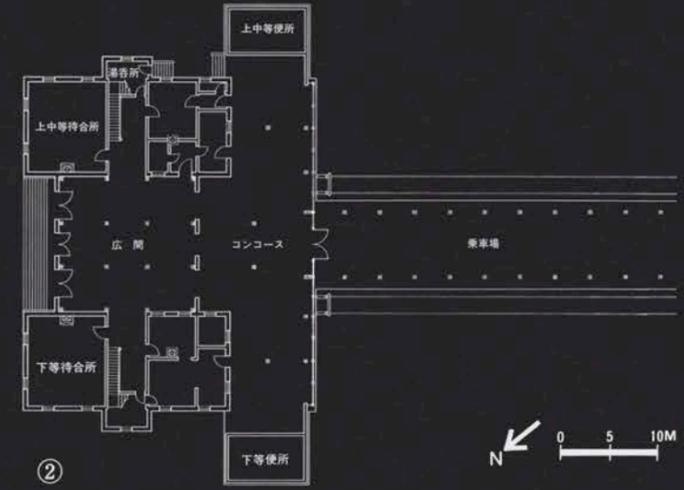
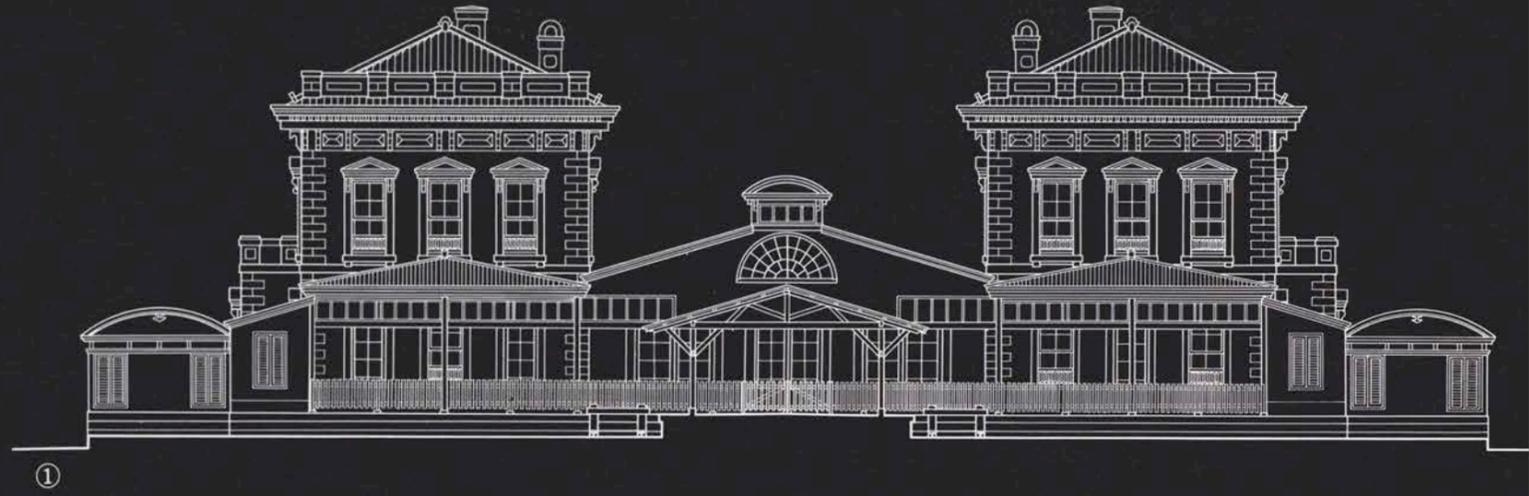


●正面図

0 2.5 5 M

J, K 1979

- ① 背面図
- ② 平面図
- ③ 側面図



新橋ステーションの復元をめぐる

「駅」——われわれは今そこに、どのようなイメージを抱いているであろうか。通勤や買い物のための乗降場所、または旅の起着点、あるいは待ち合わせの目標と、駅の利用法は人さまざまだが、われわれにとって今日の駅は、日常生活の中の当然の風景として、建築物というよりは、むしろ「場所」としてより強く認識されているはずである。

だが、かつて駅が存在そのものが、人々に鮮烈なイメージと非日常的な風景を呈した時代があった。それは明治五年新橋・横浜間に鉄道が初めて開通し、その基軸となる新橋ステーションの洋風駅舎が、新都東京に建った時であろう。

以来、百余年。新橋ステーションは、近代的陸上交通の原点として、広く人々に記憶されながら、その実像は歴史の霧の彼方へ埋もれようとしている。われわれは、その霧の皮膜を一枚一枚はがしながら、建設当初の新橋ステーションの復元を試み、「駅」のイメージの原点へ立ち帰ってみたいと考えた。

新橋ステーションは、明治四年三月に着工され、同年十一月に本屋落成。翌五年六月に乗降場が完成した。アメリカ人建築家R・P・ブリジエンスの設計になるこの洋風駅舎は、安藤広重をはじめとする往時の絵師たちの手で、錦絵としてその美しい姿を数多く今に残している。開業式の模様や、陸蒸気に群がる人々の有様を描いた錦絵の華やかな雰囲気は、新橋ステーションが、創設当時どれほど人々の耳目を集めたかを、如実に伝えてくれた。鉄道建築は、まさに時代の花形だったのである。

因みに、開業翌年の明治六年における新橋・横浜間の乗降人員は、年間百四十一万人と伝えられている。当時、東京市民は約八十九万人という記録があるので、一人平均一・五回乗降したことになり、陸蒸気に新時代の夢を託す市民の姿がうかがわれて興味深い。従って大林組プロジェクトの復元対象も、単に明治期の新橋ステーションというだけではなく、ぜひとも開業当時、つまり明治五年九月十二日当時の駅舎の復元へと一歩進んだ。鉄道の「駅」の原点は、極まれば、そこにあると考えたからである。

今に残る錦絵の点数の多さから推察しても、新橋ステーション

こうした事情を知ること、新橋ステーション復元の作業にとって、いわば前提となる助走路に過ぎないものの、このように時代背景と駅舎建設の周辺状況が鮮明に浮かび上がってきたことは、本来の復元作業に一段と意欲をかきたてることとなった。

開業当初の新橋ステーションに関する資料は、一つも残っていないと前述した。確かに、駅舎の図面（平面、立面）や計測された正式な数字の記述は残存しない。また錦絵は、数値的な観点からは役に立たない。だが菊池重郎氏は、復元の際、数値を決定するのに役立つと思われる資料を、長い年月の間、こつこつと集めておられたのである。その資料の中で、今回の復元に一番重要な意味を持つと思われるものは、開業当時の新橋ステーションを写した数葉の古写真であった。

当時、居留地の外国人向けに発行されていた英字新聞『ザ・ファースト』（The Far East）掲載のもの。時代は少し下るが、『日本鉄道紀要』に載ったもの。その他である。これらの古写真は、新橋ステーションの在りし日の姿を、はっきりとわれわれに示してくれた。

新橋ステーションの構造は、洋風の木骨石造二階建て二棟と、それらを結ぶ平屋建て一棟であり、背面に乗降場（ホーム）が直角に伸びる形である。二階建て二棟の屋根は瓦葺きで、軒にはパラペット（手すり壁の一種）を巡らし、一、二階を仕切る外壁部分と軒下には蛇腹が施されている。

菊池氏のご教示を受けながら、これらの写真から各部の構造を読み取る一方、新橋ステーションの在りし日の姿を最も正確に伝えるものは、これらの写真だけであることが判明し、今回の復元の基礎を「写真」に置くことが決定された。つまり、写真からの復元の試みである。

写真から復元図を作成する手法は、通常の透視図描法の逆の作業といえる。平面図と立面図から一つの立体的な透視図を作成する作業が通常のものだが、今回の復元作業では透視図に相当する写真を基に、消点と視点を計測して割り出し、建物全体の輪郭を求め、わずかに残存する数値と符合させてみる作業なのである。

わずかに残存する数値とは、新橋ステーションの平面の一部の寸法（幅）である。菊池重郎氏は独自の研究によって、この寸法が「柱心寸法」であるのか、「外法寸法」（外壁から外壁ま

の復元に役立つ資料は、国鉄関係各機関に何らかの形でかなり残存しているであろうと思われた。そこで、プロジェクトチームは最初の作業として、建設当時の資料の蒐集にかかったのである。

ところが、この第一段階で、早くも作業は難航した。残存しているだろうと思われた新橋ステーション関係の建設資料が、わずかに一点も残っていないのである。この難関を乗り越えるべく、国鉄の協力を仰いだ結果、一人の碩学と出会うことができた。建築史家であり工学博士の菊池重郎氏である。

菊池氏は、単にこの方面での碩学であるばかりでなく、新橋ステーションの歴史的意義を惜しまれ、その復元を自らの手で果たすべく、数少ない資料を長年にわたって蒐集しておられた（この間の事情は、菊池氏ご自身の文章に詳しい）。われわれにとって、この菊池重郎氏との出会いは、まさに稀有の幸運であった。

菊池重郎氏によって、まず新橋ステーション建設の前提ともなるべき諸事情が、明らかとなった。たとえば、新橋ステーションの立地の問題である。

当時の欧州における駅は、従来の都市構造を壊すことなく、その周辺に建設されていた。従って東京の場合も、駅は当然旧市街を壊すことなく、品川辺りに設けられてしかるべきであった。にも拘らず、汐留の地まで中心部へ深く引き込まれたのは——①築地に外人居留地が設けられており、政府の官庁もその近辺にあったため、便利さを考慮した②すぐ西側を走る東海道の旅客業者（旅籠・駕籠屋など）との摩擦を避けた③海沿いに浜御殿があり、そのなかに延邊館（明治期最初の外国貴賓館）のような外交上重要な建物があったため、あまり海際へも寄れなかった——この三つの条件が、いわば三すくみの状態となり、汐留の地に武家屋敷を三軒だけ壊して建設されることとなったわけである。

また、新橋・横浜間の鉄道は、明治政府が、やがて中山道を經由して建設しようとしていた本線に対する支線という構想の下に一つのモデルケースとして敷設したらしいことも判明した。ここであるのかを決定された。復元作業の眼目は、この決定値を基に、新橋ステーションの正確な平面寸法と高さを求めることとなったのである。

ところが、古写真のうちには、建物の垂直線が上部で少し内側に傾斜しているものがあり、正確な寸法を計測できないものがあった。そのため写真技術によってこのあたりを修正する必要が生じた。われわれは、日本写真家協会々長・元日大教授の渡辺義雄氏にご指導を賜わる一方、東洋航空事業株式会社に依頼、写真の歪みを修正する偏歪修正機を利用した修正作業を進め、計測・修正・確認を繰り返すことにより各寸法の割り出しを行い、種々のデータを比較検討した結果、ようやく復元図作成のための基礎的な数値を把握することができたのである。

われわれは、これらの数値をもとに、平面図、立面図を完成したが、さらに大林組のコンピュータを使用したグラフィックディスプレイのプログラム「スペース」を使用し、新橋ステーションの透視図をブラウン管に描出して古写真とその輪郭を比較・検証、予想どおりの結果を得ることができた。

このような現代的な写真技術あるいはコンピュータによる確認作業を経て、われわれの作業は駅舎各所の細部復元に及んでいった。古写真の各部分を可能な限り拡大し、その実景を読み取る一方、錦絵、とくに、明治絵画館所蔵の「京浜鉄道開業式行幸」（小村大雲画）はもとより明治建築として名高い国立京都博物館、大阪桜宮公会堂（旧大阪造幣寮）などもそれぞれ細部の拡大写真を数多く撮影して参考としたのである。

新橋ステーションは、かくして百有余年の眠りの中からその全体像を浮かび上がらせたのであった。新橋ステーションの場合、洋風とはいえ瓦葺きの屋根は和風であり、正面入口上部の壁面は石に模した木造なのである。建築に携わった日本の大工棟梁達の戸惑いはどんなであったろうか。伝統の日本建築技法と、陸続と導入される近代西歐建築技法との狭間にあって、力いっばい技を競い合った彼等の熱い息吹きを感じずにはいられない。新橋ステーションは、文明開化の始発駅であったばかりでなく、鉄道建築の記念碑であり試金石でもあったのだ。

ともあれ、菊池重郎氏のご指導を賜わりここにようやく当初の目標を達成することができた。あとは、同氏が学術的な復元論文を一日も早く完成されることを期待したい。